

あごら

MINI <68号>
1982年12月10日発行 ¥200 千40

今月のなかみ

<編集担当・あごら九州>

表紙のことは 私にとつての平和……田辺幸子……	1
いま、なぜ、「平和か」……小島サカエ／池田保子／藤本朋子……	2
加藤祐子／羽後せい子／福田光子／小島豊子／黒田和子	
内山英子／小野敦子	
伊藤ルイさんを迎えて——佐世保「あごら」を読む会第一回学習会……	5
内田佳崇／南三知代／池部万里／福永邦子／麓 陽子	
植田愛子／吉田文代	
83年度運営会議メンバーを公募します……	7
ことし最後の運営会議……	8
各地から……	9
あなたも新年の名刺広告を……	9
情報 女のつどい・女の講座……	10

- 何でも言える●何でも書けるミニ雑誌<あごらミニ>
- 小さな<ひろば>=AGORA・<あごら>
- あなたの声を待ってます。みんなでつくる<あごら>

最近の福教組の調査によると、中学生の半数が自衛隊は必要だと考え、その理由は「国を守るため」「戦争に勝つため」と答えているという。彼らを教えている二十代、三十代の教師の32%が真珠湾攻撃の十二月八日を知らず、日華事変・蘆溝橋事件に至っては92%が答えられなかったという。今、この数字を私たちはどう受けとるべきなのだろうか。

戦争を経験した人々が高齢化してつぎつぎ世を去り、残った人々も積極的に口を開かなくなった今日、戦争は前の時とは比すべくもない人類滅亡をめざして、ひそかに、しかし確実に己が順番を待っている気配がする。それを招き寄せるのかのように防衛費は「突出し」、教科書はかつての侵略を進出と変更しようとした。

昭和の十五年戦争が始まった時、私は小学校六年生。なぜ日本が戦争を始めたかについて何の理解もできなかった。年とともにラジオや新聞に接するようになると、いとも素直にそれを聖戦と信じた。軍人のカッコよさと勇気を讃美し（そのカッコ悪さと涙をわかりもせず）銃後の守りに協力した。親たちは「気がついたら戦争になっており、気がついたら敗戦だった」と嘆いたが、今の子どもや親た

私にとつての平和

田辺幸子

ちには戦争、あるいは平和についての十分な理解と、どう行動しなければならぬかの判断力はあるのだろうか。

いま科学時代、国も社会もその進歩のために莫大なエネルギーと金を注ぎ込んでいる。たとえば、人間の生命を救うための医学の研究、医者の養成に費やされるものはいかばかりか。それは必要なことであり、人間の幸せにつながることはあるが、一方、人間存在の基本的第一条件である平和の研究のために、何ほどの努力を社会や国は払っているであろうか。なぜ大学に医学や経済や政治を教える講座があふれているのに、「平和学」の講座、研究が無いに等しいのだろうか。不思議というより恐ろしいことと思える。

人間というのは、安定平和を求める本能と破壊闘争の本能を合わせ持ち、双方のせめぎあいの歴史を繰り返してきた。とするなら、平和学の推進とともに焦眉の急なのは、一人一人の心に刻みつけるべき第一命題として、人間が生きていることの本当の意味は、「平和のうちに生きる」「平和のために生きる」ことにほかないという平和の哲学、すなわち生命の哲学を、各自の胸にきざみつけることなのではないだろうか。

■新刊

発売BOC



『沖縄・その自然』

石島芳郎著

自然の宝庫、沖縄を知ってほしい！
一木一草への思いあふれる本ができました。沖縄に魅せられた自然科学者の「もうひとつの案内書」です。

カラー写真12点
写真・図版83点
B5変形判104頁
定価1200円
千250円

プレゼントにあごら図書券を！

卒業、就職祝、その他のプレゼントに……。『あごら図書券』をつくりました。この図書券で、ご希望の号の『あごら』『あごらミニ』を購入できます。『あごら』存続のために、ぜひご利用ください。
1000円以上、ご希望の金額を打ち込みます。

ら判断しないで、しっかり調べて投票しよう。

その二 私たちの身のまわりは、見えない形で変化している。戦前の国防婦人会などどのような形で、人の組織化が進み、気がついた時は、何も言えない世の中になっていた——というこのように、何げない勧誘に簡単に

に乗らないことも大事である。最近、国の助成を受けてできている地域ファミリーサービスクラブ、また既成の組織であるPTAや町内会なども、しっかりとその方向性を把握しておく必要があるだろう。また、マスコミによる刷り込みが顕著になってきていることから情報に敏感に見きわめていかなければならない。

その三 一人で戦争反対と言っている世の中は変わらない。組織の力とまではいかなくとも、少しでも多くの声を合わせて大声になるよう努力しよう。意外と多くの人が、同じ考えを持っているのだ。

以上いくつかの点をあげたけれど、デモ隊の先頭に立って戦争反対の声をあげなくとも何かひとつは、自分にできることがあると思う。じっとしているだけでは、知らないうちだ。私たちが自身のために、そして私たちの後に続く世代のためにも、一人一人の正しい選択が、今求められていると思う。

●平和を築くための男女関係 加藤祐子

男女の関係で大事なことは、一緒に生活しているものが互いに経済的に、また精神的に自立した者とうしかとうかということではないだろうか。これまた、言うはやすく行なうのは難しいことの一つだけれど、方向性としてそれを持たない男女関係では、いつしか体制内に取り込まれた家庭基盤充実の対象となる家庭になるのではないだろうか。

経済的基盤がないために、家族の中においても女は男の傘下において、自分の生活を遂行できなかったことは歴史的に続いていたが、今日の経済組織の中では、女に経済力がないことで、男も足かせをはめられ縛られている。

サラリーマンの男性は妻子を養うために、自分は、イヤな上司にも逆らえないし、残業もやり、転勤にも従わざるを得ない、またそのために会社や社会ににらまれることはできないと言う。これらの中には口実もあろうが現実問題として深く根ざしていることであろう。しかしそのような夫婦関係にできた大半の責任は男にあるのではないだろうか。家事、育児はすべて、女性の仕事だよ、そうしてほしい、と、女性を自分だけの所有にしたと思つたときから、男自身、自分の手足を縛りとられてきている。

男性の意識を変えるには、本を読んでないで、家事や育児に手を出させること、生活ということばで扶養義務がズシリと思ひだされるのではなく、洗たくの香りや今日の夕食を何にするかが頭に浮かぶようになることが、男が真の意味で自立していく一歩であろう。自立しあつた関係の生活の中で得るやさしさとおもひやりは、あらゆる差別構造を許さない感性と行動へと連なる原動力となり、また男女が共に生き、共に平和を築いていくための土台となるのではないだろうか。

フェミニズムと平和

●自分の性は自分のもの 羽後せい子

結婚して最初の子供を妊娠したときの心臓からつきあげてきた幸せは、一生忘れることができない。けれども、その子が生まれて六か月経ってまた妊娠したときは、予定より早かったで戸惑った。核家族なので育てることと不安があった。二番目の子が生まれたとき、上の子は一歳三か月。歩き始めてまもなく

いこうで、目の離せない時期だった。

いま、優生保護法を改めようとする動きがある。産む、産まないは個人が決めることであつて国家に管理されてはならない。たとえ同法を厳しくしてもヤミ中絶は増え続け、母体の危険は増すだろう。改正案を出す前にもつと性教育の徹底、保育の充実を實行すべきではないか。女性の立場を無視して一部の政治家である男性の視点から論議されていることに憤りを感じる。推進派は、胎児の生命尊重を掲げ、母体の良心に問いかけようとしている。しかし母親の人權こそが優先されるべきだ。100%安全で確実な避妊法がない限り、中絶は女性にとって最後の権利なのだ。女は生命をかけて出産する。たとえ中絶を選んだとしても肉体的精神的痛みは、一生消えないだろう。私も二番目の子を宿したとき、病院で「産みますか」とたずねられた。

私は自分の意志で選択し産んだ。もし私に産む義務だけが課せられていたら、私の不安は一層広がつたであろう。優生保護法改正案を自分の問題としてとらえたとき、私は目の覚める思いがした。

戦争を知らずに民主主義の中のびのびと育つてきた世代であるが、最近の、国が国民を管理しようとする動きこそ、戦争直前の全体主義への道をまた辿ることではないか。墮胎罪で中絶を禁止したり、優生保護法で中絶を認めたり、歴史はそれをくり返し人口を調節してきた。女性の性は、自分のものでありながら常に国家に管理されてきたのだ。自分の性は自分のものという認識を深め、もつと堂々と女性の「産む性」について語り、それを私たちの手で守っていかなければならない。

●関係の構造を問う 福田光子

いま現にある世の中が申し分のない平和な社会とは誰しも思わないにしても、銃火と軍靴の音のない状況を、ひとまず国の平和と考えて、それを維持していくことを願うだけでも、自分が、かなり押しなげられつつあった周囲の状況を感じる。戦争体験を語ることも、いつしか根み節としか映らない戦無派が多くなつて、戦急の実体を語るのに言葉を失うのも37年の歳月が戦争の痛みを風化してしまつたのかと思う。

だが一方で平和を求め希う側の願望の内側に熟成しつつあるものを無視するわけにいくまい。なぜ、平和でなければならないのか。あえて女の立場から、なぜ平和を叫びたいのか。力の論理が作り出した差別を否定して、新しい関係性を打ち立てる立場に立つフェミニズムの積極的な側面に光をあてたい。

人はみな、さまざまな関係の組み合わせの中に生きる。力の支配は、支配者と被支配者を生み、強者は弱者を排して立つ。植民地問題、人種問題、部落差別等、歴史にみる人類の悲劇は力による差別的連続とさえ見える。女性差別もまた、その根はひとつにつながつている。

このような関係の構造を変えるものとしてフェミニズムの一面に私は真理を見る。力の支配を排除した平等の地平にお互いの生存を認め、共に生きあえる関係を成立させること。この願望を貫くための運動が女性解放であり、それが未来を切りひらく。女と男、女と女、海をへだてた人間と人間、そして国と国。これらの関係にこだわら続け

る意識の上の作業が関係の構造を変えていく。人と集団、人と組織、人と国家。国を守る自衛より前に個人の自衛は許されないのか。

いのちを生み、いのちを育てる者にとって生命にかかわる、この関係をどうみるのか。女の立場から平和を守ろうとする緊張感はい成の安易な防衛論よりは遙かに高いものと言えはすだ。

地域からの レポート

「聖戦の碑」

小島豊子

「今次の大戦は自存自衛のため日本国の存亡をかけ、虐げられた民族の解放と万邦共栄を願っての聖なる戦いであつた。(略)改めて英霊の崇高なる精神と偉大なる業績に対し、限りなき敬慕と感謝のおもいを(略)」

これは、福岡市内の旧陸軍墓地(国有地)の一角に、県内の遺族や旧軍人らで作つた、福岡県大東亜戦没者慰霊顕彰会が今年の五月に建てた「大東亜戦争戦没者之碑」に刻まれた碑文の一部である。この土地の管理者の福岡市は、建立許可条件と違つてとして顕彰会に善処を求めた。この間、市民、平和団体等々なども市に対し碑文削除を求めて抗議したが、8月、顕彰会が碑文に「恒久平和のため建立した」と補足説明文をつけることで、市は碑文の存在を了承してしまつた。

そこで碑文撤去の署名運動を始め、私たちも署名を集めてまわつた。また、9月の国会でも問題とされたことから、顕彰会は市に対し、10月、「聖なる戦い」を「悲痛なる戦い」と改める等、二か所の部分的字句修正を

表明した。

しかしこれらの言い換えは、碑文に記された戦争賛美、侵略戦争肯定の本質を変えるものではない。今回のことは、一連の右傾化の動きに呼応したものであり、私たちはこれを許してはならない。

●新聞の反動化

黒田和子

「フクニチ新聞」は福岡県下と佐賀県の一部に販路を持つローカル紙であるが、昨年来の経営危機によって経営者が交代したところから紙面の内容に異変が起きた。一般的な記事は以前と変わりのないのだが、社外執筆陣を迎えて一面に大きく連載されるようになった「日本の視点」はどう読んでも右翼が書いたかと思ふような文が二、三割は占めている。

例えば、今夏、世界中で今までになく盛り上がった反核、軍縮運動をソ連共産党の手上によつて煽動された衆愚がわけもわからずに反核の神輿を担いでいるのだと論じる評論家。日本が戦争を起こしたからこそ、全アジア中東からアフリカまで、すべての旧植民地が独立できたことと論じる評論家。また、敗戦の日の原点到帰れ、という言葉を、瓦礫の山に埋もり、住むに家なく、飢餓に泣いたあの日々がパラダイスで、現代がまるで墮落しているようではないか、と殊更に曲解して書き立てる評論家もいる。

こうした一連の論評に、執筆者たちは日本の軍国化、右傾化を容易にするために世論操作を企んでゐるのではないかと、背筋の寒くなる思いである。福岡だけでなく全国に点在するローカル紙の幾つかが、右傾化に拍車をかけるような論陣を張つてゆけば、日本はいつか軍国主義に席卷されてゆくのではない

だろうか。一地方紙の論評といえど侮れない恐ろしさを感じている。

●日の丸掲揚運動

内山英子

「勝った、勝った、教育正常化の一里塚は築かれた」と日の丸の掲がったボールを囲み祝盃を上げる一団がいる。これは本市に隣接するT小学校の体育祭当日、日ごろから同和教育否定論を主張する一部保護者が学校に無断でつた行動である。その4か月後、これと呼応するように本市広報(82・2)で「日の丸友の会の結成」の呼びかけと同時に「祝祭日には日の丸の旗を」の趣意書が全市に回覧された。その6か月後「日の丸を太宰府の大空に」という見出しで「……4月1日(市政施行日)4月29日の両日、日の丸の掲揚状況を視察してまわつた。○○地区は見事……」とあつた。

私にはこの一連の動きと常に虐げられた者や弱者に視点を向け続けた徳富蘆花の言葉とが重なる。それは「忠君愛国其は君が説くに任す。願くは陛下の赤子として餓へしむ勿れ」である。日清戦争終了後、明治天皇の還幸を迎える群衆の中にその日の生活に苦しむ困窮者の姿をみてもらした感懐の言葉である。

私は実感として戦争を知らない。しかし、戦争の話や聞き、戦争の記録をみて、「戦争は自然ではなく人間が起こすもの」と、とらえている。しかも戦争の被害を受けるのはすべて大衆である。なかでも特に集中的に受けるのは子どもたちである。また、日の丸、君が代が戦前思想統一の道具として使われた歴史を思うとき、戦争のあし音を身近に感じる。これらを考え合わせるとき、デザインが素晴らしい、美しいという感性だけで日の丸を

みることは危険なことであると強く感じる。

●岡垣対潜通信基地の建設計画

小野敦子

福岡県遠賀郡岡垣町は、対馬海峡をはさんで朝鮮半島と対面する。防衛庁は、いま、この町にある美しい景観を誇ると同時に防風保安林でもある三里松原に、対潜水艦用超長波通信基地を建設する計画を進めている。

対潜通信基地というのは、海上艦艇や航空機による対潜警戒情報を中央司令部につないだり中央からの指令を海面下の潜水艦に送ったりする所で、岡垣町に新設されようとしてゐるそれは、500m×1500mの敷地に高さ200mの鉄塔を林立させる巨大なアンテナなのだそう(総工費200億円)。

そして、岡垣対潜通信基地から発信される超長波の通信範囲は半径1600kmで、日米首脳会談で確認されたサイパンからフィリピンに至る「海城防衛分担」の範囲と日本海全体をすっぽりと包みこむという。つまりこの基地は、いわゆる「三海峡封鎖」や「極東有事」の際の米軍・自衛隊の作戦行動に重大な役割を果たすことになるだろう。

また、この基地建設による環境破壊も心配されている。美しい景観が失われるのはもちろん、松林の一部伐採から起こる松枯れや、砂・塩・風による被害、基礎工事による海水の地下水への流入などのおそれがあるのだ。以上のようなわけで福岡では岡垣対潜通信基地の建設反対運動が始められているが、この問題はひとり岡垣町だけでなく日本の防衛のありかたそのものに関係することなので、できるだけ多くの人に知ってもらいたいと思う。

伊藤ルイさんを迎えて…

内田佳崇

前日より、佐世保は台風13号の余波を受けて雨風が激しく、国鉄の運休を一番怖れました。

夕方、ルイさんから電話で「国鉄が運休しない限り、行きますよ」との力強い言葉に励まされた格好で朝を迎えましたが、雨風はいっこうに衰える気配はなく、鳴り響く電話には「ルイさんはいらっしゃいます。中止はしません」と言いながら、祈るような気持で空を見あげていました。

予定より早い汽車で佐世保へ来て下さった
 ルイさん、へあごら九州の小島さん、福田さ

今は一つの目標に向かって力を出し合い協力し合つて成しえたということに心強さを感じております。この手ごたえをもとにもつと大きな目標に向かって、力を出し合ふは難問も吹き飛ぶのでは、と思つてます。

南三知代

それは風の序曲で始まった。我々にはふさわしい幕開きであった。しかし会場を包んだ熱気は嵐を寄せつけず、たった7人の、それもごく平凡な主婦たちの手で開かれた第1回の学習会は予想以上に成功をおさめて、無事終わったのであった。

会にとつてもだが、私にとつても確かな手
 応えを感じた初めての行動であつた。それだ
 けに胸にもズンと響くものがあり、なし終え
 た満足感と喜びも格別だつた。

しかし、今回はわれわれ会員の思惑を越えたところでトントン拍子に事が運んだ幸運さを忘れてはなるまい。結果が良ければすべてが許されるというものでもない。行動すれば

雨のあとさき

池部万里

台風十三号の影響で強い雨と風の日に、ルイさんはやって来ました。恵天候にかかわらず、会場にあふれんばかりの人たち、外の雨を、しばし忘れさせる熱気のなか、会は進められました。井手文子さんのテープでは野枝が大杉と出会い、なぜ社会主義に目ざめていったかが話されました。

いよいよルイさんの登場。小柄で、もの静かで落ち着いた風貌、しかし胸の奥に秘めたものもい、何かを語りかけるような大きなひとみは、今でも忘れられないほど、印象的でした。「私は嵐と縁が深いのです」とルイさんは語り始めます。大杉と野枝の遭厄であることを頑に拒み続けてきたルイさんが、両親の死因鑑定書を見たとき、はじめて血のつながりを感じたと、声をつまらせて話されたとき、会場のおちこちでも、そつと目頭を押える姿が見られました。地道な反戦運動を続けられ、その説得力ある話しぶりには、ぐいぐい引きつけられ、時を忘れるほどでした。予定時間を大幅にオーバーし、急いで会場を飛び出したとき、ひどかった雨も風も、すっかり上がっていたのでした。

蘇ったルイさん

福永邦子

「吹けよ荒れよ、風よ風よ」——野枝が好んで色紙に書いたという天気そのもの、当日は台風13号が九州全域を暴風圏に巻き込み北上していた。ルイさんを出迎える私の心も余波を受け、落ち着かなかつた。それと一瞬頭をかすめるのはお願いした方たちが、この風で、はたしてお見えになるかという気がかり——。

すべてが吹き過ぎて、ルイさんとの出会い。初対面の印象は、小柄で大きな瞳、静かなやさしいお声で今回の学習会のことをしきりに信念の持ち主であることがあとでわかった。

「ルイズ——父に貰いし名は——」この一冊の本を読み終えたあと、何ともやり切れない気持ちを抱かされていた。がその後ルイさんは、長い苦悶の末、すべてをぶつくり「いくら知識がたくわえられても、それが行動に生かされない限り、社会を変えていく力にはならない」と。静かで、それでいてきりりと熱っぽい語り口であつた。これまでの生きざまのほんの一コマを直接この両眼で確かめ、あたたかみある人間像を感じることができたように思えた。台風一過さわやがさが体を包むとともに、どうかもう哀しみ払いの儀式とさよならをして欲しいと、心から願つた。

学習会の成功は言うまでもなく、へあごらの一員であればこそ満たされたこの感動。そのきっかけは、高野寺のしゃくなげのちよつと色あせかけた花をながめながらのひとときであつた。そのとき、へあごらとはどういう意味なのかと何気なくたずね、ではちよつと

のぞいてみよう、ほんの軽い気持ちで参加したのだが……。

スタートの初日は、数人で友人も一緒に安さとりーダーの人の柄の良さも手伝つて、いつの間にかとけ込んだ。取るに足りないことをしゃべりすぎ、あとで穴をさがしたが、あとのまわりであつた。まだ日も浅くどうにか顔ぶれをやつと覚えたと思つたとき、いきなり決定、「伊藤ルイさんと語ろう」と言うのだ。何が何だかしかと納得いかないまま、皆の後からついて行くのがやつとだった。へあごら入会をすすめて今はいまや青森に去つた良友に感謝の言葉を贈りたい。

醒めた目と熱い心

麓 陽子

強い風のなか来て下さいました、伊藤ルイさんが述べられたことを話す前に、この会を主催するにあたって、メンバーたちを包んでいた、ある種の興奮を思い起こさずにはいられません。

8月に入つて以来、内田さんをはじめとして、メンバーたちは、準備に忙しい時を過ごしました。私はといえば、残念ながら、そのいちばん大変な時期に実家に帰っていました。当地に来て日も浅いので、何のお手伝いもできず、ただオロオロしていたのですが、皆さんの熱気が日に日に増していき圧倒されそうでした。毎日の雑事にかまけていた普通の主婦たちにとって、日常とかけ離れた企画を協力して成し遂げ社会に問うといった気負いと期待と、懸念の入りまじった興奮でした。さて興奮が最高潮に達したとき、伊藤ルイさんを迎えたわけですが、初めてお目にかか

るルイさんは、小柄でもの静かで、少し怯えたような大きな目を持たれた方でした。勉強会でのルイさんの言葉は、その一言一言に深い経験と、思慮と、洞察が感じられ、とても説得力がありました。ルイさんは、私たちにたくさんのお話を語って下さいました。私は個人的にルイさんの考え方にすべて賛同したわけではないのですが、それでもなお、感銘を受けました。そのなかで私の心に強くやきつけられた言葉が「熱い心と醒めた目」でした。その「熱い心と醒めた目」でもって、現実存在する不都合と思われることを一つ一つ取り除いてゆくことが大切だと、平和運動家として訴えられました。この態度は、すべての分野において必要なことであり、「醒めた目」で、おかしいと思うことを感知し、「熱い心」でもって、それを訴え、訂正していく勇氣を持たねばならないと思います。

現在の日本では、私生活の範囲においては一定、価値観の多様性、批判の自由が許されていますが、社会的な、あるいはもっと大きく国家的なレベルにおいては、建前としてはそれらの多様性、自由が保障されていますけれども、本音の部分においては、価値観の画一性を求め、批判を封じるといった傾向が、心の奥深くに現在でも根強く潜んでいると思います。この意識のどこかに存在する、同一価値観への強制を絶えずチェックし、軌道修正を主張していく勇氣と知識が必要でです。

これは、女性問題にもあてはまることで、建前としては、女性の生き方の多様性が認識されているようですが、本音、つまり意識下においては、長い歴史の過程で都合のよいように作られた、画一的で典型的な、女の生き方のパターンを押しつけようとするし、女性

自身も、その既成概念にとっぷりとつかつて、神経が麻痺してしまっています。女性はいま一度「醒めた目」でもって、長い歴史の過程で、女性に押しつけられてきた、いや、あるいは、生活防衛のため甘受してきた、画一的な女性に対する価値観を見つめ直し、自分の心になかぬ、おかしいと思うことを、「熱い心」で主張していく勇氣を持たねばなりません。女性の生き方の多様性が、社会的に容認されることによって、それぞれの個性にあつた人生を送れるのではないのでしょうか。

会って変わったわたし

植田愛子

「お前はあぐらだ」と夫から皮肉られつつ、自信喪失の更年期夫人が、なぜかへあごらに出席するようになって間もなく、ジャーナリストの知人から紹介された「ルイズ」松下竜一著を読んだが、その中の数人の女性の生き方は大きな刺激になった。

そのルイズさんが来て下さるということになって、グループだけでなく一人でも多くの人にと友人知人に話しかけるのだが、パンフレットも何もないので自分の言葉でどれだけ伝えられるか、もどかしさばかりで効があがらずというところ。それでも予想以上に集まって盛会だった。

生の人間に触れて、その人の考えを聞くすばらしさ。そしてそんなことができた喜びは、やはり考えてばかりいても味わえなかつただろう。一つのことに向かつて共に行動した連帯感。虚勢ばかり張って肝心なことには尻込み勝ちな私の生活を再三叩き直さねばならぬと痛感している。

嵐の中を何のためらいもなく来て下さった
ルイズさん、へあごろ九州の小島さん、福田
さん、ありがとうございました。

無能、無知でもよい。だからこそ嘲笑も甘
受して出ている。

共に考え向上したい平凡な主婦殿、おいで
まっせ、へあごろへ。

肩の張らない話し合いを

吉田文代

松下竜一氏の「ルイズ」が講談社のノンフ
イクション賞を受けた6月18日、同じ日にこ
の本を友人にいただいて読みました。伊藤野
枝の娘として生きたルイズさんの58年間の物語
です。タイミングよくへあごろでは、この
本の主人公である野枝の娘、ルイズさんと語る
会が実現し、大盛会でした。

私たちの「へあごろ佐世保」は今年の5月に
発足したばかりで、メンバーも10人足らずで
す。この会のリーダーが、1年に1度くらい
は、大きいゲストを招いて会合をしたいと常
に語っていたのですが、それがこんなにも早
く実現するなどは、誰1人考えてもみなな
かったことでした。もちろん、実現する迄には、
私たちの知らない所で走り回られたリーダー
の尽力があったのですが。第1回の大きな会
合とあって、ゲストをお迎えするまでには、
会場の選択や協力券作成、当日の会場での分
担作業やら、私たちには初めての経験ばかり
でした。私も「ルイズ」を読んでいたの
で、楽しみにしていましたが、当日東京に出かけ
る用事ができて、この会には、直接参加出来
なくて、とても残念に思いました。その日の
興奮と熱気を手に汗して感じたメンバーの方

たちが口を揃えて、「とても素晴らしかった
よ。」と言っているのをきくと、容易にその雰
囲気が想像できます。リーダーの内田さんも、
「いろいろ心配はあったけど、やればできる
ものなのね」と感激を語ります。その後、ル
イズさんの近況をビデオで観せていただいたの
ですが、静かな中に胸張って生きていた姿は、
とても印象的でした。

へあごろ・佐世保」はまだ歩き出したばかり
ですが、肩を張らずに語れる会として、私も
初めから参加しています。日頃、家庭や、人
間関係で思い悩むことを語り合い、女とは、
主婦とは、家族とは、と、気軽に語り合いな
がら、その中で自分を見つめ、反省しながら
少くとも、今の自分よりは進歩があればよい
と思う気持ちで参加しています。

編集を終えて

「平和」という大きな重要な問題を「あ
ごろミニ」のテーマにとりあげたことに
ついて、いささか大風呂敷を広げ過ぎた
気もするが、今この時期に自分の立つて
いる地歩を確かめておきたい想いから、
「へあごろ九州」では、自分にとって平和
とは何を数回にわたって例会で討議した。
座談会をそのまま掲載するにはやや散漫
となったため、それぞれが文章にして、
ひとつの議論をかかげた。この議論を、
今後の実践の中でさらに確かなものにし
ていきたい。

今回、へあごろ佐世保」の皆さんが紙面
に登場。本当にうれしい。へあごろ」の輪
がひろがり、運動がさらに多彩になるこ
とをへあごろ九州」のメンバーは、この
上なく喜んでいる。

(S・F)

83年度運営会議メンバーを公募します

代表者を置かない「へあごろ」は、1人1人、自分が代表、の思いでかわることをモツ
トーにしていますが、会員は全国に散在しているため、総会に代わる議決機関として、運
営会議を設けています。

83年度メンバーを次のとおり公募しますので、ふるってご応募ください。

【募集人員】 17名(再任を妨げません)

【応募締切】 82年12月25日

【条件】 ◆会員歴5年以上の会員であること。会費を完納していること。

◆「へあごろ」を支える熱意があること。

◆「へあごろ」の運営について、物心両面の責任を負うこと。

◆「へあごろ」と「あごろ」の企画に加わり、率先して行動する。

◆赤字が発生した場合には、分担する。

◆年3回の運営会議に、確実に出席できること。

◆(83年度は、東京で1回、地方で2回開催の予定。そのうちの1回は、へあ
ごろ拠点会議)と共催、合宿の予定です)

◆会議の宿泊費、日当、食事は支給されません。旅費は、実費の半額相当

分のみ「あごろ図書券」で支給されます。

◆活動歴その他、参考資料がある方は提出してください。

あなたもできる『あごろ』27号をお友達にどうぞ。 戦争阻止

27号は、特集テーマを急提変更、「いま平和を支える」としました。

内容は、住井する「今から言う」、丸木俊「原爆の図は私の遺言」、朴寿南「イカサの
翼」、阿部汎克「果てしなきポーカーゲーム——軍縮の限界」、山下智恵子「小説・熊沢光
子」、伊藤ルイ「母・伊藤野枝」などのほか、特集「いまなぜ沖縄戦か」を36ページ、「手
をこまねいていいのか——法改正と私たち」を25ページ、「8・15女たちの声」を23ページ
にわたって特集しました。どれもずしりと重い内容です。戦争を私たちの日常にひきつけ
て考える号として、あなたの反戦活動にご利用ください。11冊以上1割引、21冊以上2
割引、50冊以上は3割引とします。グループや婦人学級のテキストにもどうぞ。

定価は、1冊1500円、送料、1冊250円、2冊300円、3冊400円、お申し
込みは同封振替用紙(東京015264あごろ編集部)で。

ことし最後の運営会議

11月20日(21日)、京都で

昨年の後始末に追われたことしの前半、そして10周年のつとめと、あわただしかった82年も、またたくまにもう歳末。「あこら」27号の追ひこみで目が回りそうななか、ことしの最終運営会議を京都府婦人センターに1泊して持ちました。大阪から1人、京都から3人、メンバー以外の参加者もあり、深夜1時まで話がはずみました。主な話し合いは次のとおりです。

- ◆83年度運営会議メンバーについて
・「ミニ」を通じて公募する(7面参照)。
・定員は現行どおり17名。
・再任は妨げない。
・17名以上の応募者があった場合は、82年度の運営会議メンバーで選考する。
- ◆運営会議を召集できない緊急事態の処理
たとえば優生保護法「改正」反対呼びかけ団体に加入するか、など、緊急議題の発生が最近ふえています。
- ◆最終責任者3名プラス事務局(3名)の責
以上が可とすれば、認める。
- ◆ただし、事後報告する。
- ◆83年度活動方針案
下欄のような意見が出、たたき台として公示、83年1月の運営会議で決定することにします。
- ◆81年度欠損金の処理方法
・81年度のメンバー全員で分担する。

- ・現在17名から168万円が提出されているが、未提出の人には書状を出す。
- ・提出額相当分の「あこら」または「あこら図書券」を提出者に渡す。
- ◆81年度事務局員の責任追及
・あいまいにせず運営会議名で文書を出す。
- ・経済的責任は運営会議全メンバーで分担する。
- ◆「あこら」の財政再建について
・「あこら図書券」を発行し、できるかぎり活用するよう、キャンペーンする。
- ・「ミニ」の広告スペースをふやし、意見広告や会員の活動紹介等にあてる。(席上、高橋すみさんから、さつそく下欄のような広告原稿が出されました。1段分が1万円です。ふるってご活用ください)
- ・手書きの手紙で知人に「あこら」講読訴える。
- ・「近くの図書館に「あこら」を」の一声キャンペーンを。
- ・婦人問題の情報キャラバンを組み、全国を行動する。(必ずしも黒字にならないのではないかと、との反論も出しました)。
- ・余裕のある方は基金を、のキャンペーンを行なう。
- ◆拠点間の交流について
・年1回(夏?) 拠点間連絡会議を合宿で開く。
- ・旅費は各拠点持ち。

その際、運営会議も開き、合同で討論する。近接する拠点、たとえば京都と大阪、九州と佐世保などで交流会を持つ。

- ◆「ミニ」の改善案について
・拠点担当ページを減らしても、情報面を充実してほしいとの声が強いので、拠点担当ページは5ページ以内とし、拠点の実状に応じ、3〜4ページでも可とする。
- ・最近では、法改正などが地方議会ですすめられようとしているので、地方の情報も積極的に送ってもらう。
- ・形態は当面、現行どおり。
- ・価格は定常号は200円とする。
- ・前号と関連ある記事のほうが読者としてはおもしろいので、担当拠点は、前号および次号の担当拠点和連絡をとりあう。
- ・掲示板の欄を拡大する。
- ◆「ミニ」の来年度担当拠点
・83年1月事務局2月京都3月仙台4月柏5月大阪6月東海7月札幌9月武蔵野10月旭川11月浦和12月九州
・84年1月事務局2月東京3月京都4月仙台佐世保、新潟のように、まだ拠点ではないけれども会員の多いところには、声をかけて寄稿してもらう(68号の佐世保のように)。
- ・毎号、他のミニコミを紹介、ミニコミ・ネットワークづくりの一助とする。
- ◆本誌の改善案について
・本誌がrippになったのはいいが、日常生活から浮き上がっているとの声も。来年度は、もっと日常との結びつきを。
- ・とくに、子どもが人間として育っていない状況が心配。この問題も盛り込む。
- ・テーマとしては「家族」「女と平和と教育」「女性解放と反戦」「女と老い」「差別」「ボラ

83年度

へあこらへ活動方針案

あなたの声をぜひお聞かせください。11月の運営会議で、たたき台として次のような案が出されました。皆さんのご意見をもとに、83年度第1回運営会議(1月15日東京で開催の予定)で活動方針案を練ります。あなたのご意見を、1月10日までに事務局までお寄せください。

【現在までの提案】

- ・女の情報活動として「あこら」「あこらミニ」を万難を排して続刊する。
- ・そのため、資金活動、事務局体制を強化。親しい人と呼びかけ、会員拡大を。できれば倍増を目指す。
- ・合宿して、拠点間会議、活動家会議を開く。
- ・ミニコミをテーマに、市民運動、地域活動、平和運動、エコロジー運動と連動した運動を。
- ・読み手(受け手)と作り手との距離をちぢめるための努力を。
- ・子どものいのち、心の荒廃、公害、教育など、日常生活と結びついたテーマを。
- ・「あこら」読書会をもっと活発に。まず何よりも「あこら」を読みこむことが大切では。
- ・共同保育など、地域の中の拠点をつくり出す。
- ・拡販をすぐ行動にうつせるよう、毎号振込用紙を入れるなどの努力を。

ンティア「いまミニコミは」性役割「女のアイデンティティ」仕事を創る」ほか。

・「ミニ」の編集を通じ、拠点の力をレベルアップし、将来は拠点が担当できるように、地方会員も十分参加できることがある。も

と編集にも参加を。読み手としての会員から創り手としての会

員に脱皮していききたい。

◆編集会議と運営会議の調整について

・「あごら」は、会員が読むものであると同時に、資料誌として日本の婦人運動に貢献している面も大きい。編集会議に参加して

いるメンバーだけでテーマを決めるべきも

のではない。

・といって、実際の作業をする人が意欲のわ

かないものでは困る。

・在京の運営メンバーが積極的に編集にかか

る。全体の方向性を見定めながら調整す

る。

☆

ことしの運営会議は計4回、名古屋、京都

でも各1回開催、メンバーの意気もピツタリ

合ってきました。このま別れるのは惜しい

という声も大きいのですが、83年度は新メン

バーを公募します。ただし再任は妨げません

ので、82年度の方も立候補はできます。

「あごら」に新風を吹き込む方が多数立候補

されることを祈って、一同、ホッとしながら

秋の京都を後にしました。

地方の方も本誌の編集に参加を

企画案提出、テーマほどこき、リライト、寄稿、書評など、地方でもできることがたくさんあります。あなたのできることをハガキに書いて編集部までお知らせください。

優生保護法「改正」の動き まず地方議会から！

山口県「福岡県など、県議会レベルに、優生保護法一部「改正」案が上程され、あやうく成立しかけるという動きがありました。

まず地方議会を固め、それを「世論」として国会を強行突破の戦術かとも考えられます。

福岡県の場合、県議会最終日、同案が上程されるという動きを、県議会ただ1人の女性議員（社会党）が察知、最終日の前日、各婦

人団体に連絡が入り、最終日の朝、あごら九州など、各団体のメンバーが、全議員の

ところを回り、同法案の危険性を説明、間一髪のところで保留にしました。

この時期になぜ「改正」しようとするか、の意味が一般に周知していないなかで、「いのちをまもろう」という改正派のキャンペーン

のほうが説得力をもっていますが、明らかに富国強兵策の一環として、ふたたび「産めよ

増やせよ」がもくろまれていて、性的な増やせよ。人間の一番プライバシーな部分まで国家によって管理されるとき、管理体制がどれ

ほど確立されるかわからないことを、折あるごとに説明しよう。この問題は女だけの問題、それも若い人にだけ関わることだと、

無関心な人が、あまりにも多いようです。

この大ききで2000円

あなたも新年の名刺広告を

へたて60ミリよこ35ミリ

黒ペンまたは2B以上の鉛筆書き原稿を12月25日までにお送り下さい。

代金は同封振替用紙で、どうぞ。

どの団体、どの企業にも頼らない「あごら」。財政難は深刻です。

会員の交流と財政カンパを兼ねて「新年名刺交換のページ」を新年号の「ミニ」に設けます。1マスでも2マスでも、あなたの「名刺」をどうぞ。

11月3日、京都でも「改正」反対集会

ヤミ中絶がふえ、いのちがかえってあふない！ 子捨て子殺しがふえる、障害者が強制的に断種されるおそれがある……など、会場

は女のたち声でムンムン。もちろん「あごら

京都」面々も参加。

12月12日、女たちが核基地をとり囲む！

ロンドから西へ80km、グリナムコモン空軍基地に米国の核ミサイルが配備されることが発表されたとき、イギリスの女たちは子ども

もまじえ10日間の「平和行進」、数人は自分のからだを鉄柵に鎖でしばって抗議しました。

ことしも12月12日、基地を囲みます。世界の女たちが支援のメッセージを送ります。

11月分会費・基金の受入状況

81年度会費 2人 30000円

82年度会費 31人 9万15000円

83年度会費 17人 8万35000円

基金 7人 8万40000円

11月の新入会員は13名

浦和、長崎各2、仙台、福島、前橋、坂戸、船橋、江東、杉並、相模原、小郡各1

♡ほとんどの方が12月で会費が切れます。お早めにお振込みを。会費が何よりの支え。



このスペースを1万円で買いました！

〈あごら〉の財政を助けるためです

- 意見広告を出しましょう！
- あなたの仕事をPRしましょう！
- プレゼントには、〈あごら図書券〉を！
- そして、〈あごら〉の財政を支えましょう！

まず実行しました。

〈あごら東海〉高橋ますみ



〈女のつどい・女の講座〉

日	時	テ	マ	会	場
12月4日(土)	13:00~16:00	女と戦争—札幌・戦争を許さない女たちの会 助言者 斉藤千代			清水谷公園(地下鉄赤坂見附・永田町)
	13:00~	戦争を許さない女たちの会・集会とデモ			横浜「港北公会堂」
	13:00~	よこはま婦人問題フォーラム「女性の学習活動のあり方」横浜市婦人問題係			本郷地区センター
5日(日)	13:30~	戦争への道を許さない女たちの神奈川本郷集会(パートII)講師 森正弘 (映画「侵略」制作者)連絡先 045-892-0117(井上)			
	14:00~17:00	湘南「あこら」を読む会 連絡先 0463-32-2021(福本)			婦人総合センター(0466-27-2111)
6日(月)	10:00~12:00	「女・仕事・社会参加」			保谷公民館
7日(火)	10:00~12:00	「婦人の自立と社会参加を考える」			片瀬公民館(0466-27-2711)
	18:30~	「母性保護の範囲について」雇用平等法をつくる会			渋谷勤労福祉会館
8日(水)	13:00~15:00	「鉄道の仕事差別裁判」25回公判			東京地裁民事19部2F
	10:00~17:00	「82年反戦・反核・軍縮・平和運動の総括と新たな運動の前進を…」総評			労金会館9Fホール(お茶の水)
11日(土)	13:00~19:00	優生保護法「改正」反対!討論&コンサート			浦和・共済会館
	14:00~	「長時間保育問題を考える」長時間保育問題を考える集会実行委			神戸市教育会館6F大ホール(保育あり)
		あこら九州・会宿(12日まで)			別府
12日(日)	13:30~16:00	「日本の防衛とは」講師 青木公(朝日新聞)婦人の行動をひろげる会			地婦連
		あこら札幌・例会「今年1年をふりかえって」			
14日(火)	18:30~20:30	「自立の心理学」学習会			あこら読書室(03-354-9014)
18日(土)	13:30~	婦人問題懇話会・第3回例会「国連婦人の十年行動計画はどうあるべきか」			千代田区立産業会館・地下鉄東西線竹橋
	18:00~	ヨコスカ市民講座「アジアからみた経済大国日本」			横須賀・文化会館
19日(日)	13:00~16:00	あこら仙台・例会			荒町福祉会館
20日(月)	10:00~12:00	「今日の私が明日の私たちに」婦人問題講座 講師 浅田ほか			恵比寿社会教育会館3F(03-443-5777)
23日(木)	18:30~	あこら忘年会 会費1500円			あこら読書室
25日(土)		あこら武蔵野・忘年会			連絡先 丹羽(0423-43-6749)
1月15日(土)		83年第1回あこら運営会議			あこら読書室(03-354-9014)

あこら可能性教室新講座 *自立のための心理学

講師 しま・ようこさん

(フェミニスト心理学者)

日時 12月14日(火)

(毎月1回・第2火曜)

午後6時30分~8時30分

場所 あこら読書室(地下鉄・丸の内線「新宿御苑前」)

四谷方面口下車スグ)

費用 1期6回分で3000円

非会員は 6000円

学習テーマ(予定)

12月14日「ヘコミュニケーションと自立」

1月11日「学校からの自立」

2月8日「ヘューモアと自立」

3月8日「自立から相互支持へ」

外国のフェミニストと

英語を学びませんか

月曜クラス

毎週月曜夜6時15分~7時30分

月謝 3千円(非会員は6千円)

水曜クラス

毎週第1第3水曜

10時30分~正午

月謝 2千円(非会員は4千円)

各地のあこら連絡先

あこら旭川

旭川市神楽岡1条5丁目3 田代慶子
011666656237 077811

あこら札幌

札幌市西区琴似1条6丁目グランドハイツ琴似408号 細田英理子
011166442927 0663

あこら仙台

仙台市茂庭字生台前4の65 三船照子
0222244559994 098202

あこら浦和

浦和市南浦和2-19-8 山中マツ江
048888733680 0336

あこら柏

松戸市五香六実720 古賀節子
047388783667 0270

あこら北東京

豊島区東池袋1-45-11 メゾン金子202
0398553308 0170

あこら武蔵野

小平市小川町1-763-86 丹羽雅代
04234366749 0187

あこら京王

調布市仙川町3-12-32 福井浅子
0333087871 0182

あこら神奈川

川崎市多摩区東生田2-22 森山方沼田千恵子
04499339079 0214

あこら東海

愛知県愛知郡東郷町和合ヶ丘1-12 伊藤汎美
05613892386 047001

あこら京都

京都市左京区二乗寺築田町56の1 塚崎美和子
07579914623 0606

あこら大阪

茨木市西駅前町10-323 遠藤由美
072622333495 0567

あこら九州

福岡市中央区筥井2-4-6 小島豊子
09255217624 0810